

wie を用いたドイツ語関係節に関する一考察 —日本語ヨウナ節との対照を通して—

城本 春佳

要旨

This paper handles the German adnominal clauses that are introduced with “wie” and include personal pronouns. When the personal pronoun in the “wie” adnominal clause corresponds to the head noun, the clause functions like a relative clause. These “wie” adnominal clauses have both restrictive and non-restrictive uses. The restrictive “wie” adnominal clauses function like Japanese adnominal clauses with “yona”. The clause restricts the reference of the antecedent like the restrictive relative clause, on this occasion “wie” and “yona” broaden the range of the restriction to include a similar group. On the other hand, the non-restrictive “wie” adnominal clauses function adverbially, which is different from the relative clause. They state a simultaneous event with the event expressed by the main clause, or provide additional information concerning the antecedent.

キーワード : wie 関係節, ヨウナ節, 制限用法, 非制限用法, 制限範囲の拡張

1. 本稿の目的

ドイツ語の関係節¹では通常、関係節内の主名詞(head-noun)を同一指示する要素は関係詞によってマークされる。関係詞は補文標識としての機能も果たすため節頭に置かれ、元の位置は空所となる。

(1) Ich wünsche mir die Mütze_i, [die_i Hans gestern \emptyset _i trug].

*I wish REFL the hat RP Hans yesterday wore*²

これに対し、ドイツ語にはwieによって導かれる(2)のような名詞修飾節構文も存在する。

(2) Ich wünsche mir eine Mütze_i, [wie Hans sie_i gestern trug]. (Heidolph, et al. 1981:833)³

I wish REFL a hat WIE Hans it yesterday wore

ここでは、修飾節内の主名詞を同一指示する要素は人称代名詞 sie によってマークされており、wie が補文標識としての機能を果たしている。意味的には、(1)では私が欲し

がっているのは昨日ハンスが被っていた帽子そのものであるのに対し、(2)では私が欲しがっているのは昨日ハンスが被っていた帽子に類似するものであると解釈される。(2)のような構文は、関係詞こそ用いられていないが、主名詞を同一指示する要素が修飾節内の述語に対して格役割を担っているという点で、関係節に類似する構造を持っていると言える。しかしこれまで一般的なドイツ語文法書では、(2)のような構文は、**wie** によって導かれる付加語文⁴(名詞修飾節)の一種としての記述はあっても、関係節と関連付ける記述はほとんどない(一部例外があるが、これについては後に詳しく述べる)。また、先行研究においても、これらの構文を関係節と関連付けて分析する議論は、管見の限りでは見られない。

そこで本稿は、(2)のように **wie** によって導かれ、主名詞を前方照応する人称代名詞を含む構文(以下「**wie** 関係節」と呼ぶ)について、特に意味機能の側面から、(1)のような通常の関係節とどのように異なるのかを明らかにすることを目的とし、類似する意味機能を持つ日本語の連体修飾節との対照を通して分析を行う。

2. **wie** の基本的な意味・用法と **wie** 関係節

前述のとおり、主名詞を前方照応する人称代名詞を含む **wie** 節については、管見の限り先行研究はほとんど見られない。また代表的なドイツ語文法書においても、当該の構文を **wie** の用法の一つとして取り上げて記述しているものはほとんどなく、多くは **wie** の基本的な用法に紛れて、当該の構文に当てはまるものが挙げられている程度である。そこで本節では、**wie** の基本的な用法について概観しながら、代表的なドイツ語文法書において当該の構文がどのように扱われているかをまとめる。

まず、**wie** の最も基本的な用法は、英語の **how** のような様態の疑問副詞としての用法である。

(3) *Wie schmeckt das Essen?* (Duden 2005:584)

how tastes the meal

この用法から連続して、関係副詞としての用法もある。

(4) *Er staunt über die Art, [wie sie sich aus der Affäre zieht].* (Duden 2005:584)

He is-amazed at the way how she REFL from the affair gets-out

Duden(2005)では、このような関係副詞として機能する **wie** によって導かれる節の一例として、(5)のように主名詞を前方照応する人称代名詞を含む例も挙げられている。

(5) *Es fand ein Konkurrenzkampf_i statt, [wie man ihn_i bisher nicht kannte].* (Duden 2005:584)

it happened an economic-competition AFF WIE people it up-to now not knew

Duden(2005)では、「関係副詞 wie は人称代名詞を伴って先行する名詞に係ることができる(p.1042)」という記述はあるが、この場合どのような意味を表すかといった説明はない。また wie には、英語の as のような比較を表す用法もある。

(6) Ihr Gesicht wurde weiß wie Schnee.

her face turned white as snow

(6)では白さの比較対象として雪が挙げられているが、比較対象が節の形で表されることもある。IDS(Institut für deutsche Sprache)による文法書 Grammatik der deutschen Sprache (Zifonun et al. 1997)では、比較を表す wie によって導かれる節が動詞に係るもの(7)、文に係るもの(8)、形容詞/副詞に係るもの(9)と並んで、名詞に係るもの(10)-(11)も挙げられている。

(7) Er verhält sich, [wie er sich immer verhalten hat]. (Zifonun et al. 1997:2333)

he behaves REFL as he REFL always behaved has

(8) [Wie ich erwartet hatte], kam heute kein Fleisch auf den Tisch. (Zifonun et al. 1997:2334)

as I expected had came today no meat on the table

(9) Spät, [wie es war], konnten wir nicht mehr dort vorsprechen. (Zifonun et al. 1997:2334)

late as it was could we no more there call-on

(10) Eine Frau_i, [wie sie_i es ist], sollte man lieber ernst nehmen. (Zifonun et al. 1997:2334)

a woman WIE she it is should man rather seriously take

(11) Eine solche Herzlichkeit_i, [wie sie_i mir damals entgegengebracht wurde], ist mir später nie

a such kindness WIE it me then shown AUX is me later no

wieder begegnet. (Zifonun et al. 1997:2334)

again happened

(10)-(11)のように名詞に係る場合には、wie 節は主名詞を前方照応する人称代名詞を含む。更に Helbig, G./Buscha, J.(1977)では、このような名詞に係る比較文(Vergleichssätze)について、「関係文と比較文を混同してはならない(p.746)⁹」として(12)-(13)のような例文を挙げている。

(12) (Solche) Experimente_i, [wie sie_i Röntgen durchgeführt hat], sind die Grundlage der

(such) Experiments WIE them Röntgen carried-out has are the basis GEN

modernen Forschung.

modern research

(13) Die Experimente_i, [die_i Röntgen \emptyset _i durchgeführt hat], sind die Grundlage der modernen

the Experiments RP Röntgen carried-out has are the basis GEN modern

Forschung.

research

ここでは、(13)のような通常の関係節と(12)のような人称代名詞を含む比較文としての *wie* 節が、混同する可能性を指摘されるほど類似する構文であることが示唆されているが、両構文に具体的にどのような意味の差があるのかという点については説明されていない。

Heidolph, et al.(1981)では、名詞を修飾する限定的付加語文(*determinierende Attribution*)の下位分類として、制限的関係節(*einschränkende Determination*)、注釈的関係節(*erläuternde Determination*)と並んで、(14)-(17)のような *wie* によって導かれる比較文(*vergleichende Determination*)が挙げられている(pp.829-833)。

(14) Anne hat ein (solches) Kleid_i, [wie Marie eins_i hat].

Anne has a (such) dress WIE Marie ones has

(15) Marie trägt ein (solches) Kleid_i, [wie es_i heute viele junge Mädchen tragen].

Marie wears a (such) dress WIE it nowadays many young-girls wear

(16) In einer Nacht_i, [wie man sie_i selten erlebt], klopfte es plötzlich am Tor.

In a night WIE people it rarely experience knocked it suddenly the door

(17) Ich wünsche mir eine Mütze_i, [wie Hans sie_i gestern trug]. (=2)

I wish REFL a hat WIE Hans it yesterday wore

またここでは、「主名詞(*determinierte Konstituente*)は付加語文内では人称代名詞によって実現される」といった構造的特徴や、「制限的関係節(*einschränkende Determination*)や注釈的関係節(*erläuternde Determination*)と違って、意図する対象について述べるだけでなく、それと同じクラスに属するものについても言及する」といった意味的な特徴についても言及されている。

この他、*wie* には、英語の *as* や *when* のように時間副詞節を導く用法もある。

(18) [Wie sie ins Zimmer kommen], hört er auf zu spielen. (Duden 2005:634)

as they into-the room come, stops he AFF to play

wie の意味・用法は上述のもの以外にも多岐にわたるが、本節では最も基本的な用法で、かつ本稿で分析対象とする、主名詞を前方照応する人称代名詞を含む *wie* 節の用法と連続的に捉えられる用法を挙げるにとどめる。

以上のように、今日の代表的な文法書では、主名詞を前方照応する人称代名詞を含む *wie* 節は、大抵関係副詞節や比較文の一種として扱われ、その意味機能についての詳細な記述はない。唯一 Heidolph, et al.(1981)のみが当該の構文を関係節に並ぶ付加語文(*Attributsatz*)の一部として扱い、通常の関係節との意味の違いについても説明しているが、

非常に簡潔な説明にとどまっており、またコーパスデータに見られる実際の **wie** 関係節の意味は、ここで説明されているものだけでは把握できないものもある。そこで、次節以降では、**wie** 関係節の意味機能をより包括的に、また詳細に捉えられるよう、類似した意味機能を持つと考えられる日本語の構文との対照を通して分析していく。

3. **wie** 関係節の制限用法と非制限用法

日本語の構文との対照に入る前に、本節ではまず、**wie** 関係節には制限用法と非制限用法の両方が存在することを主張する。

通常の関係詞を用いた関係節に見られる、制限用法と非制限用法の意味的な差異は次のようなものである。

(19) Schließlich nahm ich ein Kinderbuch_i, [das_i mir der Verfasser \emptyset_i geschickt hatte], und las
finally took I a children's-book RP me the author sent had and read
darin. (Erich Kästner „Das fliegende Klassenzimmer“ p.16)
in-it

(20) Uli_i, [der_i \emptyset_i am liebsten mit Matthias zusammen gewesen wäre], trat an Martin heran. „Darf
Uli RP at-the best with Matthias together been AUX asked to Martin AFF may
ich nicht mit euch kommen?“ (Erich Kästner „Das fliegende Klassenzimmer“ p.63)
I not with you come

(19)では、主名詞「Kinderbuch (児童書)」の指示する意味の範囲を、関係節「作者が私に送ってくれた」が制限・限定しており、制限用法であると言える。一方(20)では、主名詞「Uli (ウリー)」の指示する対象は、関係節の有無によって変わることはなく、非制限用法であると言える。

wie 関係節にも同様に制限用法と非制限用法の両方が見られる。

(21) Ein Lehrplan_e, [wie ihn_i der Strickhof ZH für den kommenden Winter anbietet], muss Ziel
a curriculum WIE it the Strickhof ZH for the coming winter offered must aim
einer fortschrittlichen Ausbildung sein. (St. Galler Tagblatt, 13.05.1997)
GEN progressive education be

(22) Einmal sah ich den Vater_i, [wie er_i am Heizungskamin stand], ...
once saw I the father WIE he at-the fireplace stood
(Uwe Timm „Am Beispiel meines Bruders“ p.99)

(21)では、主名詞「Lehrplan (教育計画)」の指示する範囲が、**wie** 節によって「Strickhof ZH が次の冬のために提案したものやそれに類似するもの」に限定されているので、制限用法であると言える。一方(22)では、主名詞「Vater (父)」の指示対象は関係節の有無

によって変わることはなく、非制限用法であると言える。

通常の関係節の制限用法である(19)と、wie 関係節の制限用法である(21)の表す意味を比較すると、(19)では「Kinderbuch (児童書)」の指示する範囲は作者が送ってくれたものそのものに限定されているのに対し、(21)では、Heidolph, et al.(1981)でも簡単に述べられていた通り、「Lehrplan (教育計画)」の指示する範囲は Strickhof ZH が次の冬のために提案したものそのものだけでなく、それと類似するものも含んでいる。このような通常の関係節と wie 関係節との意味的な対立は、(23)-(24)のような、日本語の連体修飾と、ヨウナを用いて表現した場合との意味の対立と一致しているように思われる。

(23) [昨日ハンスが \emptyset_i 被っていた]帽子 i が欲しい。

(24) [昨日ハンスが \emptyset_i 被っていたような]帽子 i が欲しい。

(23)では「帽子」の指示する範囲は、昨日ハンスが被っていたものそのものに限定されているのに対し、(24)では「帽子」の指示する範囲は、昨日ハンスが被っていたものそのものだけでなく、それに類似する特徴を持っているものも含んでいる。

このように、wie 関係節の制限用法とヨウナ節が同等の意味機能を持っていると考えられることから、次節では、まず wie 関係節の制限用法について、日本語のヨウナを用いた連体修飾節（以下「ヨウナ節」）との比較を通して、その意味機能をより詳細に検討していく。

4. wie 関係節の制限用法とヨウナ節

前述のとおり、wie 関係節の意味機能についての先行研究はほとんどない。一方日本語のヨウナ節については、いくつかの先行研究があり、これらはいずれもヨウナ節の意味機能に関するものである。そこで本節では、まず日本語のヨウナ節についての先行研究を概観し、そこで指摘しているヨウナ節の意味機能が、制限用法の wie 関係節にも当てはまるか否かを検討する。

4.1 日本語ヨウナ節に関する先行研究

日本語のヨウナ節についての先行研究としては、森山 (1995)、安田 (1996) (1997)、高橋 (2009) などが挙げられる。これらはいずれも、「A ような B」という構文における A と B の関係性 (A が B に対しどのような意味関係を持っているか) によって、この構文の意味機能を分類するものである。それぞれの先行研究で挙げられているヨウナ節の意味・機能の分類は、概ね以下のように互いに対応していると考えられる。

| | | | | | | |
|---------------------|----------------|------------|------------|----|----|----|
| 森山 (1995) | | 推量 | 比喩・比況 | 例示 | | |
| 安田 (1996) (1997) | 内容の名づけ (例示) | 様態 (例示) | 比喩 (例示) | | | |
| 高橋 (2009) | | 印象 | 比況 | 例示 | 概要 | 目的 |

図1 先行研究におけるヨウナ節の意味機能の分類

森山 (1995) の分類は、「A と B という二つの項の同一関係を考える場合、完全な同一関係を除けば、論理的には、包含的か、不一致か、不明かの三つの場合しかない(p.496)」という理論に基づくものであり、「A ような B」という構文において、A と B が「包含」関係にあるときには、下の例文(25)のように、A は B の例を示す「例示」の意味を持つ。「不一致」関係にあるときは、(26)のように、A と B は本来別物であるが類似性によって対照されている「比喩・比況」の意味を持つ。「不明」関係にあるときは、(27)のように、A と B は一致するものであるか否かは不明であるが、話者の判断によって類似するものとして述べる「推量」の意味を持っている。

(25) [\emptyset_i 教師を殴るような/殴ったような]学生 $_i$ は退学だ。「例示」(森山 1995:516)

(26) まるで[16世紀の貴族が \emptyset_i 着ていたような]服 $_i$ ですね。「比喩・比況」

(安田 1996:68) ⁶

(27) そこに[\emptyset_i むしりとられたような]着物 $_i$ の切れ端が落ちているのを見た。「推量」

(森山 1995:500)

これに対し安田 (1996) (1997) では、「A ような B」において A が示す事柄の「事実性 (リアリティー) に着目し、A が「仮説的」であれば「様態」の用法になり、「反事実的」であれば「比喩」の用法になり、「事実的」であれば「内容の名づけ」の用法になるとしている。森山 (1995) の分類と比較すると、「様態」は「推量」と、「比喩」は「比喩・比況」と意味的にも対応している。森山 (1995) にはない「内容の名づけ」は、「A の述部には主に言語活動を伴う動詞がきて、その内容は即ち B であると名付けられることを示す (安田 1996:66)」ものである。下の例文(28)では、「彼が書いた」内容を話し手が「楽観的な予想」と名付けたと解釈される。また、安田 (1996) (1997) では、「例示」は「様態」「比喩」「内容の名づけ」と並列する一つの用法ではなく、それぞれの用法に同時に現れるものであるとされている。

(28) [彼が \emptyset_i 書いたような]楽観的な予想 $_i$ とは全く別の結果になった。「内容の名づけ」

(安田 1996:76)

高橋 (2009) は、「A ような B」の意味・機能を「比況」「印象」「例示」「概要」「目的」に分類している。「比況」は森山 (1995) の「不一致—比喩・比況」、「印象」は「不明—推量」、「例示」は「包含—例示」とほぼ対応しているが、「概要」「目的」は森山 (1995) や安田 (1996) (1997) では扱われていないような例文を対象としている。「概要」は(29)のように、「A ような B」において B は言語表現に関わる名詞であり、その内容を説明する A との間に「ような」が介在することで「おおよそ」「概略」といった意味が加わるものである。「目的」は(30)のように、A は実現・成立すべき事態、B はそのための手段や方法の類を表す名詞がくる。

(29) [忍耐の時間を経て、収穫を待つというような]意味だという。「概要」(高橋 2009:291)

(30) [クマに刺激を与えないような]工夫 「目的」(高橋 2009:296)

この「概要」と「目的」の意味機能を持つヨウナ節は、いわゆる「外の関係」⁷⁾の構造を持っている。主名詞が修飾節内の述語の項として解釈できる構造ではないため、本稿で分析対象としている、主名詞を前方照応する人称代名詞を含む *wie* 節とは構造的に対応していない。

また安田 (1996) (1997) の「内容の名付け」という分類は、ヨウナ節の意味機能の記述として曖昧であり、また論文内で「内容の名付け」の例文として挙げられているものは、「例示」または「概要」のいずれかに分類可能であると考えられる。

そこで、本稿で *wie* 関係節と対照するのは、主名詞が修飾節内の述語の項として解釈可能な、いわゆる「内の関係」にあるヨウナ節に限定することとし、このようなヨウナ節の持つ意味機能は先行研究をまとめて「比喩・比況」「推量・印象」「例示」の三種類であるとして、以下分析を進めていく。

4.2 *wie* 関係節の制限用法とヨウナ節の意味機能

4.2.1 比喩・比況

「比喩・比況」の用法は、「A ヨウナ B」「B, *wie* A」において、B の指示対象は A の指示対象と同一のものではありえないが、二者の間には何らかの類似性が認められるため、B の属性を限定するのに A が用いられているという用法である。

(31) マリーは[中世の王妃が \emptyset_i 着ていたような]服 $_i$ を着ている

(32) Marie trägt ein Kleid $_i$ [wie es $_i$ die Königinnen im Mittelalter trugen].

Marie wears a dress WIE it the queens in-the Middle-ages wore

(31)では、マリーが着ている服は中世の王妃が着ていた服そのものではありえないが、何らかの類似する特徴(デザインや豪華さなど)があるため、マリーが着ている服がど

のようなものであるのか、その指示対象を限定するのにこのような表現が用いられている。(32)も同様の意味内容を表しており、wie 関係節の制限用法も「比喩・比況」の用法を持っていると言える。

「比喩・比況」の用法で用いられている「B, wie A」「A ヨウナ B」という構文の意味を解釈するプロセスには、ラネカーの参照点理論(Langacker 1993)が関与していると考えられる。(31)-(32)では、「B, wie A」「A ヨウナ B」における A の表す指示対象「es die Königinnen im Mittelalter trugen」「中世の王妃が着ていた(服)」が参照点となり、それに類似する特徴を持った服の集合が支配領域として定められ、この表現が実際の談話において指示する対象、つまり実際にマリーが着ている服がターゲットとなる。下の図 2 において、R は参照点(reference point)、T はターゲット(target)、D は参照点によって限定されるターゲットの支配領域(dominion)、C は認知主体(conceptualizer)、破線の矢印は認知主体が参照点を経由してターゲットに到達していくメンタル・コンタクト(mental contact)を表す。

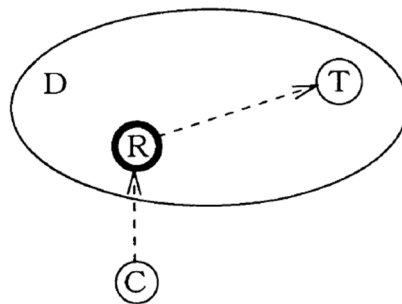


図 2 参照点構造(Langacker 1993:6)

4.2.2 推量・印象

「推量・印象」の用法は、「A ヨウナ B」「B, wie A」において、B の指示対象について話者の推量によって限定を加えている用法である。A の内容は、事実であるかどうかは不明であり、あくまで話者の判断による推量や印象を表している。

(33) マリーは[\emptyset ; H&M で売っているような]服_iを着ている。

(34) Marie trägt Kleidung_i [wie es_i bei H&M verkauft wird].

Marie wears clothes WIE it at H&M sold AUX

(33)では、マリーが着ている服が本当に H&M で売られていたものかは分からないが、話者はその服の特徴から H&M で売られている服に似ていると判断し、このように表現している。(34)も同じ意味内容を表しており、wie 関係節の制限用法も「推量・印象」の用法を持っていると言える。

「推量・印象」の用法の意味解釈のプロセスも、「比喩・比況」の場合と同じく参照点

構造に見られる認知プロセスと類似するものとして捉えられる。(31)-(32)では、「B, wie A」「A ヨウナ B」における A の表す指示対象「es bei H&M verkauft wird」「H&M で売られている (服)」が参照点となり、それに類似する特徴を持った服の集合が支配領域として定められ、この表現が実際の談話において指示する対象、つまり実際にマリーが着ている服がターゲットとなる。

「推量・印象」の用法と「比喩・比況」の用法とで異なる点は、「比喩・比況」の用法ではターゲットは支配領域のうち、参照点を除く範囲から選ばなければならない((31)-(32)ではマリーが着ている服は中世の王妃が着ていたものと同一のものではあり得ない)のに対し、「推量・印象」の用法では、ターゲットは参照点と重なっていてもよい((33)-(34)では、マリーの来ている服は H&M で売られている服であってもよい)という点である。

4.2.3 例示

「例示」の用法は、「A ヨウナ B」「B, wie A」において、A が B の一例を表すような用法である。

(35) 私は[昨日ハンスが \emptyset_i 被っていたような]帽子 $_i$ が欲しい

(36) Ich wünsche mir eine Mütze $_i$, [wie Hans sie $_i$ gestern trug]. (=2)

I wish REFL a hat WIE Hans it yesterday wore

(35)では、私が欲しい「帽子」の一例として「昨日ハンスが被っていた」ものが挙げられている。(36)でも同様の関係が成り立っており、wie 関係節の制限用法も「例示」の用法を持っていると言える。

「例示」の用法の表す意味は、先に挙げた「比喩・比況」「推量・印象」とは大きく異なる点がある。「比喩・比況」「推量・印象」の用法では、「A ヨウナ B」「B, wie A」という表現が談話の中で実際に指示する対象は、参照点 A によって想起される支配領域に含まれる個体または集合であるのに対し、「例示」の用法では「A ヨウナ B」「B, wie A」という表現が指示する対象は、A を例として含む集合そのものであるという点である。「例示」の用法の意味解釈にも参照点構造に類似した認知プロセスが働いているとすれば、A が参照点となって支配領域が定められるところまでは「比喩・比況」「推量・印象」の場合と共通しているが、「例示」の場合には、この支配領域全体が「A ヨウナ B」「B, wie A」の指示するターゲットになる。

4.3 wie 関係節の制限用法のまとめ

以上見てきたとおり、wie 関係節の制限用法は、日本語のヨウナ節のうち、主名詞が修飾節内の述語の項として解釈される構文と同等の意味用法を持っていると言える。本稿ではこれらの意味用法を先行研究にならって「例示」「推量・印象」「比喩・比況」の

三つに分類したが、この分類は「A ような B」「B, wie A」において A（修飾節）が B（主名詞）に対しどのような意味関係を持っているか、という基準による分類である。このような三つの異なる意味関係を表し得る「ヨウナ」及び「wie」の持つ意味機能は、類似性による主名詞の選択範囲を広げることにあるとまとめることができる。

本節で見てきた wie 関係節は、制限用法であり主名詞の指示する対象の範囲を制限・限定する機能を持つ。この点は通常の関係節の制限用法と同じであるが、その制限の範囲が、関係節の表す意味の範囲に留まるのではなく、類似性や部分的な同一性によって制限の範囲が広げられるという点が、通常の関係節と異なる wie 関係節の特徴なのである。

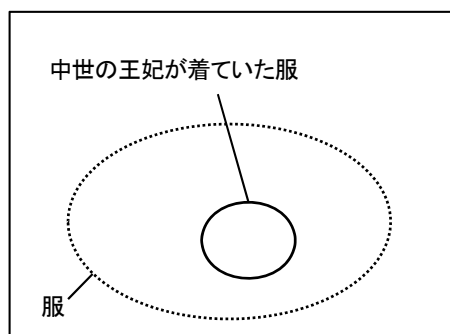


図3 通常の関係節

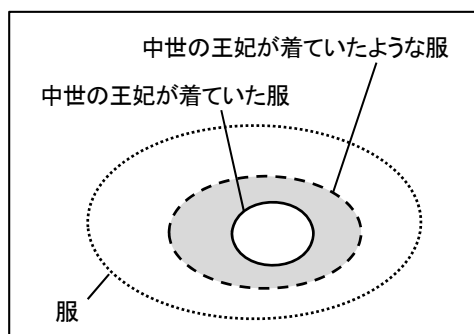


図4 wie 関係節（比喩・比況）

通常の関係節では、関係節の表わす指示対象が個（個体）であれば主名詞の指示対象もそれと同一の個体でなければならず、関係節の表す指示対象が種（集合）であれば、主名詞の指示対象はその集合の中に含まれるものでなければならない（図3の実線で囲まれた範囲）。一方 wie 関係節の制限用法では、ターゲットの検索領域は、参照点（関係節の表わす指示対象）と類似しているものまたは部分的に同一の特徴を持っているものにまで広げられる（図4の破線で囲まれた部分）。「比喩・比況」の用法では、図4のように破線で囲まれた範囲から実線で囲まれた範囲を除いた網かけの範囲から指示対象が選択される。「印象・推量」の用法では、実線で囲まれた範囲も含む破線で囲まれた範囲全体から指示対象が選択される。「例示」の用法では、破線で囲まれた範囲全体が指示対象となる。このように、指示対象の選択の仕方は用法によって異なるが、実線で囲まれた範囲から破線で囲まれた範囲まで指示対象の選択範囲が広がることこそが wie のもつ機能である。

5. wie 関係節の非制限用法

wie 関係節の非制限用法は、制限用法のように主名詞の指示する意味の範囲を限定するのではなく、主名詞に対して情報を付加する機能を持つ。これは、前節で対照した日

本語ヨウナ節には見られない意味機能である。

前節で扱った *wie* 関係節の制限用法は、2 節で概観した代表的なドイツ語の文法書において、関係副詞としての *wie* を用いた表現や比較文(*Vergleichssätze*)の一部として扱われていたものであったが、*wie* 関係節の非制限用法にあたる表現は、管見の限りドイツ語文法書では扱われていない。

本節では、*wie* 節がもつ情報の性質から、*wie* 関係節の非制限用法には二つの異なる用法があると主張する。一つは、*wie* 関係節が主節の表す事態と同時に起こっている事態を表す用法で、もう一つは主名詞についての背景的な情報を付加する用法である。

5.1 付帯状況

wie 関係節が、主節が表わす事態と同時に起こっている事態（付帯状況）を表す用法とは、以下のようなものである。

(37) *Einmal sah ich den Vater_i, [wie er_i am Heizungskamin stand], ... (=22)*

once saw I the father WIE he at-the fireplace stood

この用法は、管見の限りでは主節述語は *sah* 「見た」のような知覚動詞に限定される用法である。*wie* 関係節は、主節主語が主名詞を知覚した際の、主名詞の状態や、主名詞が参与している事態を表している。(37)を、関係代名詞を用いて書き換えた(38)と比較すると、(38)では主節主語の知覚対象として主名詞 *den Vater* 「父」に焦点があるのに対し、(37)では *wie* 節が表わす *er am Heizungskamin stand* 「彼（父）が暖炉のところに立っている」という状況全体が焦点になっている。

(38) *Einmal sah ich den Vater_i, [der_i Ø_i am Heizungskamin stand], ...*

once saw I the father RP at-the fireplace stood

そのため、(37)(38)の各文の後に、*wie* 節内に含まれる *Heizungskamin* 「暖炉」に関する記述（「彼はそれを3年前に買い、今もとても気に入っている」）を続けると、通常の関係節を用いた(38)に文を続けた(40)では、焦点となっている「父」から突然「暖炉」の話に変わっているため非常に不自然な印象を与えるが、*wie* 関係節を用いた(37)に文を続けた(39)では、焦点となっている状況に含まれている物についての話が続いているため、自然な表現となっている。

(39) *Einmal sah ich den Vater_i, [wie er_i am Heizungskamin stand]. Er hatte ihn vor drei Jahren*

once saw I the father WIE he at-the fireplace stood he had it before three years

gekauft und er gefiel ihm noch immer sehr.

bought and it was-liked him still always very

- (40) ??Einmal sah ich den Vater_i, [der_i Ø_i am Heizungskamin stand]. Er hatte ihn vor drei Jahren
once saw I the father RP at-the fireplace stood he had it before three years
 gekauft und er gefiel ihm noch immer sehr.
bought and it was-liked him still always very

付帯状況を表す *wie* 関係節のこのような機能は、(39)のような、同時性を表す時間副詞節を導く接続詞 *wie* の機能と連続的に捉えることができる。

- (41) [Wie sie ins Zimmer kommen], hört er auf zu spielen. (=18)
as they into-the room come, stops he AFF to play

5.2 背景的な情報付加

wie 関係節が、背景的な情報を付加する用法とは、以下のようなものである。

- (42) Der Impressionismus_i, [wie er_i ihn von Liebermann und Cezzanne kannte], ist sein Einstieg.
the impressionism WIE he it from Lieberman and Cézanne learned is his approach
 (Berliner Morgenpost, 03.07.1998)

(42)では、主名詞 Impressionismus「印象派」について、*wie* 節が *er ihn von Liebermann und Cezzanne kannte*「彼はそれについて Liebermann と Cezzanne から学んだのだが」という、主節の文脈からは独立した背景的な情報が付け加えられている。この文は(43)のように関係代名詞を用いて書き換えることができる。

- (43) Der Impressionismus_i, [den_i er von Liebermann und Cezzanne Ø_i kannte], ist sein Einstieg.
the impressionnism RP he from Liebermann and Cezzanne lerned is his approach

(42)と(43)は意味的にはほとんど差がないが、ドイツ語の通常の関係節は制限用法と非制限用法に表記面での差はなく、(43)のように通常の関係節を用いて表現すると、関係節は修飾句として名詞句に埋め込まれているように解釈されやすい。一方、(42)のように接続詞 *wie* を用いて表現すると、より主節からは独立した意味内容として解釈しやすくなるため、主節の文脈から独立した背景的な情報を付加する場合には *wie* 関係節が好まれるのではないか。そのため、関係節の内容が主節から独立したものでなく、むしろ主節が表す内容と密接に関わっているような場合には、通常の関係節を用いて表現すべきであり、*wie* 関係節を用いて表現することはできない。

- (44) Marie_i, [die_i Ø_i gut Englisch sprechen kann], bekommt ein Stipendium.

Marie RP good English speak can gets a scholarship

- (45) *Marie_i, [wie sie_i gut Englisch sprechen kann], bekommt ein Stipendium.

Marie WIE she good English speak can gets a scholarship

(44)では、関係節の表す「英語が上手に話せること」は、主節が表す「奨学金を得ること」の条件である。このように関係節の内容が主文の内容に密接に関わっているような場合には、(45)のように *wie* 関係節を用いて表現することはできない。

また、背景的な情報付加を表す *wie* 関係節は、その主節からの独立性の高さから、(46)のような挿入文に書き換えることができる。

(46) Der Impressionismus; --- er kannte den; von Liebermann und Cezzanne --- ist sein Einstieg.
the impressionism he learned it from Lieberman and Cézanne is his approach

6. まとめと今後の課題

本稿では、主名詞を前方照応する人称代名詞を含む *wie* 関係節について、特に意味の側面から分析を行った。まず、*wie* 関係節にも通常の関係節同様、制限用法と非制限用法の両方があることを示した。*wie* 関係節の制限用法にあたる例文は、代表的なドイツ語文法書では関係副詞としての *wie* を用いた表現や比較文(*Vergleichssätze*)の一部として扱われており、その意味については「意図する対象について述べるだけでなく、それと同じクラスに属するものについても言及する(Heidolph, et al. 1981)」といった説明にとどまっていた。しかし、構造が類似している日本語のヨウナ節と対照することで、*wie* 関係節の制限用法は日本語のヨウナ節と同じく、「例示」「推量・印象」「比喩・比況」の意味を持っていることが明らかとなった。この時、通常の関係節の制限用法との意味的な相違から、*wie* の果たす機能は、主名詞の指示する範囲を広げることにあると結論付けた。今回は分析の対象外としたヨウナ節の「概要」や「目的」の意味用法についても、ドイツ語で *wie* を用いて表現できるか、今後検討していくことで、*wie* とヨウナの意味の差をより包括的に捉えることができるだろう。また、*wie* の制限用法の意味が「例示」「推量・印象」「比喩・比況」だけなのか、という点についても、今後検討していかなければならない。

wie 関係節の非制限用法については、既存のドイツ語文法書では扱われていない用法であるが、本稿ではこの構文には「付帯状況」と「背景的な情報付加」という二つの異なる用法があることを示した。「付帯状況」は主節が表わす事態と同時に起こっている状態や出来事を表す用法であり、これは同時性を表す時間接続詞としての *wie* と連続的に捉えられるとした。「背景的な情報付加」は主名詞についての背景的な情報を付加する用法であり、これは主節の文脈から独立した意味内容を表す挿入文に似た機能を持っているとした。*wie* 関係節の非制限用法についても、制限用法の場合と同様、「付帯状況」と「背景的な情報付加」以外の意味用法はないのか、今後検討していく必要がある。また、(37)-(38)、(42)-(43)のように通常の関係節と *wie* 関係節とで書き換えが可能な例がある一方、(44)-(45)のように、通常の関係節は多くの場合 *wie* 関係節に書き換えることはできない。どのような場合に通常の関係節を *wie* 関係節に書き換えることができるのか、そ

の条件を今後詳細に検討していくことで、wie 関係節の持つ意味機能をより明確に捉えることができるだろう。

註

- ¹ ドイツ語学においては通常、関係節は *Relativsatz* 「関係文」と呼ぶが、本稿では日本語を記述する際の用語の統一性を考慮し、「関係節」とする。その他のドイツ語の副文についても同様に「従属節」と呼ぶ。
- ² 英語の逐語訳中で用いている略語は次の通り：REFL – reflexive pronoun, AUX – auxiliary verb, GEN – genitive, RP – relative pronoun, AFF – affix
- ³ 参考文献からの引用例文中に付されている同一指示を表す *i* や空所を表す \emptyset などの記号は、本稿の筆者によって付されたものである。
- ⁴ ここでの「付加語文」は一般的なドイツ語文法書における *Attributsatz* の訳語であり、言語学一般で用いられる「付加詞(*adjunct*)」とは異なる。2 節で用いられている用語も、一般的なドイツ語文法書の訳語に従う。
- ⁵ ここに表記しているページ数は、在間進訳「現代ドイツ文法」(1982) に拠る
- ⁶ 森山(1995)では、「比喩・比況」の例文は「A ような B」の A が名詞であるものしか挙げられていないが、本稿では修飾節に述語動詞を含む構文を分析の対象としているため、便宜上安田(1996)の例文を援用する。
- ⁷ 寺村(1975-1978)による日本語連体修飾節の二分法で、「内の関係」は主名詞が修飾節内の述語の項として解釈可能なもの、「外の関係」はそのような解釈が成り立たず、修飾節が主名詞を「内容補足的」に修飾しているものを指す。

参考文献

- Duden Band4 : Die Grammatik(2005) Dudenverlag. Mannheim /Leipzig /Wien /Zürich.
- Heidolph, K.E./Flämig, W./Motsch, W. (1981) Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin.
- Helbig, G./Buscha, J.(1977) Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht, Leipzig.
- Langacker, R.(1993) “Reference-point Constructions“ Cognitive Linguistics. Volume 4, Issue 1. pp1-38
- Zifonun, G./Hoffmann, L./Stecher, B.(1997) Grammatik der deutschen Sprache, Berlin: de Gruyter.(Schriften des Instituts für deutsche Sprache; 7)
- 高橋美奈子 (2009) 「「ような」の介在する名詞修飾表現「X ような Y」について」『四天王寺大学紀要』17号
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味 その 1~4」 『日本語・日本文化』4~7号 大阪外国語大学留学生別科
- ヘルビヒ, E. /ブッシャ, J. 著 在間進 訳 (1982) 『現代ドイツ文法』三修社

- 森山卓郎（1995）「推量・比喻比況・例示－「よう／みたい」の多義性をめぐって－」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』岩波書店
- 安田芳子（1996）「連体修飾形式「ような」の意味・機能－V ような N の場合－」『神田外語大学紀要』2
- （1997）「連体修飾形式「ような」における〈例示〉の意味の表れ」『日本語教育』92号
日本語教育学会